

震災後の気仙沼をあるく
—民俗芸能を通してみるコミュニティの原像

I はじめに

梅屋といいます。お招きいただきありがとうございます。お話ししたいことがたくさんあるのですが、話題が話題なのであまり積極的にお話ししたくないような、アンビギュアスな気持ちでここに参りました。

まず自己紹介しますと、私は呪いとか祟りとかいうものをキーワードに東アフリカで社会=文化人類学的フィールドワークをしています。それは、理論的な根拠がいくつもあるのですが、そのことは今回は省略します。

一方で、日本では90年代に新潟県の現在の佐渡市で「憑きもの」の調査を集中的にやった経験がありますけれども、そのほかにも日本各地でお祭りとか民俗芸能の調査をしています。

今回は、2005年から2009年まで東北学院という大学に奉職していた関係でお世話になった、気仙沼の方々のお話をします。被災地、「気仙沼」での最近の私の仕事を中心にお話ししたいと思います。

私は、今回の震災に関しては、「わかったような顔をする」ことは、できるだけしないようにするつもりでいます。現地では今でも、総括とはほど遠い状況で先の見えない生活を送っている人々がいます。いったい何が起こったのか、日々問い直している毎日だと思います。そういった意味では震災は現在も進行中で、全体像などわかりっこない、というのが私の立場です。

そういう意味では、私は皆さんの多くと同じところに立っているつもりなのです。ひとつ、若干違うところがあるとすれば、被災前の「気仙沼」を、その素晴らしさも、ややこしさも含めて知っている、という点です。その経緯を簡単に紹介しておきましょう。私は、仙台にある大学につとめていた時に、社会調査実習の舞台として二年間にわたって気仙沼にお邪魔しました。その時お世話になったのが大学の同窓会の方々でした。その後も、研究会の視察や、私も運営にかかわったアフリカ・ウガンダとの国際シンポジウムなど、いろいろな縁が重なって、仙台市民だった4年半の間に気がつく19回も気仙沼を訪れていました。ちなみに、直近では11月下旬に行っていました。それはたぶん、25回目の訪問だと思います。昨年に続いて今年も気仙沼で年を越す予定です。

II モニュメントの含意

さて、皆さんが気仙沼も含めた宮城県沿岸部をあるいたときに、遺構、というかほとんど土台だけを残して更地に近くなった住居跡に散在する祭壇の存在に注目され、関心を持たれた、と聞いています。津波の猛威はすさまじくて、残ったのはふるくからある神社と遺跡だけ、という状態です。高台移転しようとしても、宅地造成しようすると遺跡が出てきてしまって頓挫する、という厳しい状態が続いていました。

そういった場所に関心を持つのは無理もないことです。いったいどのような関心をもったのかは後程うかがう機会があるかもしれませんが、ここでは、私に見えている景色について解説しておきます。

正直言って、あまり抵抗なく写真をとれるようになったのは、ここ半年なのです。有名な第18共徳丸の写真も、昨年5月—かなり早い時期に撮影してはいますが、おそろおそろ撮影した覚えがあります。

メンタルマップ、という言葉をご存知ですか？自分の身の回りの地理を、日常生活の経験などに照らして、人間はかなり主観的に秩序づけています。これは度量衡に即した客観的な地図とはすこしずれたところがあるのが普通です。初めて気仙沼の鹿折地区を訪れた人には、土台だけを残した更地に見えるかもしれませんが、津波以前を知る人にとっては、そう見えていないのは当然です。玄関、お茶の間があったところ、床の間があったところ、みなそれぞれに秩序だった記憶と重ね合わせてみているのです。私でもそうで、有名になった第18共徳丸の前にはプレハブのコンビニが営業していますが、私はあそこで調査実習用の住宅地図や借り出してきた文書を学生と一緒にコピーしたり、夜のコンパのための酒を買いだしたりした経験と結び合わせてあのプレハブを見えています。

さて、みなさんが見た遺構のところどころにそなえられた花や水、あるいはお菓子などですが、私は、これには、いくつかのパターンがあると考えています。ひとつは、皆さん方もおそらく想像されたように、震災、つまり地震とそれにつづく津波の被害に遭った人々を追悼する意図。おそらくは第18共徳丸の艦底付近のものはそうだろうと思います。ただ、これ自体は、地域の外からきた、瓦礫撤去の方や、旅行で見えた方々が主体になってつくられたものだろうと思います。今回11月に寄せ書きのようなものがあつたので確認しましたが、いずれも被災地へのお見舞いと励ましのことばが記されていました。構造としては外部から訪れた方々が被災地の被

害者とりわけ犠牲者に対して追悼の意を表したものでしょう。

私が思うに、もっとも多いのは、おそらくもともと先祖を祀っていた仏壇や祭壇を流された方が、自宅に献花したり供物を捧げる例です。震災前のこの地域の信仰生活を考えに入れないと、これらすべての祭壇が震災で発生したように見えてしまうと思います。

皆さん方の家に仏壇や神棚、祭壇はありますか？私の家にはありません。しかし、私の知る限り気仙沼の多くの家には被災前からかなり立派な仏壇や祭壇・神棚があるのです。それから、家のなかでも、「神がいる」とか明確な言明こそしませんが、空間が地域の、あるいは民俗の論理によって秩序づけられていたようです。自宅を流され、いわゆる「みなし仮設」に住んでいるある男性は、年の瀬の押し迫ったある日、「お年取り」について「ことしは何もなし」と言いながら、本来は母屋には三つ揃えの松、7本のしめ縄を飾り、離れには二段の松に5本のしめ縄、水回りには3本の輪、また井戸、風呂、離れの水道、トイレ、自転車、自動車、耕耘機、臼、若水迎の桶など10数カ所に正月飾りをする、と語りました。井戸や風呂はまだしも、自転車や耕耘機に正月飾りをつけるのは部外者には奇異に見えるかもしれませんが、空間やモノを印づける独自の論理が働いていそうです。

ご存じのように、第18共徳丸はモニュメントとしての保存が検討されています。部外者からみれば、「津波の恐ろしさを忘れないために」という理由はもっともなものですが、この問題については実はかなり議論する必要があります。

ひとつは、費用の問題。ただでさえ逼迫する気仙沼市の財政には、あの船を安全なかたちで保持し、何らかの機能を果たすものとして運営する経費はありません。それから、果たすべき機能。ただのモニュメントにしてはもったいないので、中身に何らかの機能をもたせたらどうか、という案はあるが、具体化しない。否定的な住民感情として、自分たちの町、あるいは家を破壊した船をみたくない、という気持ちも根強いものがあります。

阪神・淡路大震災の後、兵庫県を中心に現在確認されているだけで288の震災モニュメントができ、年々増えていますが、見ると失った家族のことを思い出す、などいわゆるPTSDを訴える人も多いのです。社会学者の分類では、大きく分けると「身近な人の死」というリアリティを認識させる過去に向かうもの、生き残った「わたしたち」というリアリティを認識させる未来へ向かって何らかの宣言が

なされるもの、という二つです。それらが重複するものはサンプルとして検討した116のうち皆無だった、ということです(今井2001)。第18共徳丸の場合、部外者にとっては前者の性格を持つモニュメントと位置づけられるかもしれませんが、当事者にしてみると、津波というあれだけ広範囲で様々な犠牲が出た津波のシンボルにはなりにくい。当事者にとっては、あの船は手を合わせる対象にはなりにくいのです。そうすると、後者の可能性が出てきますが、それにはまだまだ当該の地域の人々の議論が必要です。

もっとも深刻な問題は、当該の地域の住民がほとんど仮設にいるか、市から離れてしまっていて、コミュニティとしての機能が果たせないでいることです。地域住民不在で議論だけが空回りしているのが現状です。おそらくは、鹿折中学校に間借りしている鹿折公民館が何らかのリーダーシップをとるだろうと期待しています。

もちろんこの種のモニュメントは経験者、というよりは経験していない未来の世代へ向けてつくられるものですから、当事者の感情だけを全面的に尊重するというのではなく、いろいろな判断でつくられるわけですが、私はこの第18共徳丸の場合も、もし残すとしても、先ほど触れたような民俗の空間認識と秩序を無視したかたちで行われてはならないと思います。

III 「お年取り」

ここで気仙沼での日常的な信仰生活を垣間見るために、2011年の年末の年越し準備を紹介したいと思います。「お年取り」といいます。私は、2011年には気仙沼で年を越しました。今年も気仙沼で年越しする予定です。いったい2011年の正月はどうか、緊張しながらあるいていましたが、私は、幸い、二つの家のお年取りを見せていただきました。

(スライド)

まずは、昆野家(屋号は日渡)の例。神棚も無事でしたから、例年に近いものはしたいと考えているということでした。「正月には七房のついたしめ縄、スカシ、(紙の)網、星の玉(ほしのだま)を7枚セット(ほかに5枚セット、3枚セットがある)になったものを天照皇大神宮の札と一緒に八幡神社から選ばれた総代役が12月1日に祓いを受けてもらってくる。星の玉は、松竹梅や万両カブなどと一緒に海老が描かれたもので、めでたいことを表す。父の代でしめ縄は自分でつくるのをやめたが、昔は自分でつくっていた。しめ縄から垂らす房は、左から7、5、3、5、5、3、5、3、3と垂らしたものだ。

星の玉は市内の新城の引退した元漁師がつくっている。「開運福祿寿」のスカシは、八幡神社宮司の齋藤漢氏がつくったものである。仏壇の左にしめ縄、その下には星の玉二枚、右に紙の網と御幣、下には左から星の玉三枚、大国主。右正面上には恵比寿大黒が祀られ、その下には、事代主、星の玉二枚、「大漁」「満作」「千万両」「餅」「宝船」窯神を貼る。その上にはお守りをおさめる棚があり、長磯の穂葉(あきば)神社、巖島神社、八雲神社、成田山新勝寺の札がある(家の4代目の人が成田に参ったときのものだから飾っている。現在ならともかく当時成田山に参るのは大変だったろう。ちなみに昆野さんは16代目)。家には4つ神棚があり、それぞれ天照皇大神宮、大年神、恵比寿・大黒天が祀られている。4つめにはお札を飾っている。4つの神棚ではそれぞれ飾り付けが異なる。それぞれ飾るものは異なっていたが、御幣束とスカシは共通して飾っていた。

31日と1日は、床の間でお膳を囲む。オガミゾナエといって箕にお餅をふたつ入れて松の枝を乗せて四方拝して餅を切り、囲炉裏で焼く。供物台には、松の枝と赤と白の幣束が置かれており挨拶に来た人のお祝いをそこに置くことになっている。赤い幣束は1月12日に山に供え物とともにオハネリ(お米)を蒔いて山で拝む。1日に若水汲みをしてそれで料理の支度をする(昔は若水桶を使ったが現在はあるものを使う)。現在は行わなくなって20年以上になるが、3ヶ月はまめがらの火で竈を炊いた。4日にヤマイレ(山入れ)といい、山でオハネリを蒔いて芝刈りのまねをして松の枝を持ってくる。6日はツメキリユ(爪切り湯)、7日は七草、11日は農ハダデル(はじまる)といって、農作業をはじめの日である。ヤマイレで持ってきた松の枝は、新年初めての雷の日(ハツライサマ:初雷様)にマユダマ(繭玉。1月13日から20日ぐらいまで飾る)の一部と一緒に燃やす。20日はマユダマガユといいマユダマを降ろし、粥を食べる。昔は濡れ縁だったので、杉を切ってきて濡れ縁におき、しめ縄など正月飾りをそこにかけておいた。昔はその杉を秋に稲掛けにした。カレイ(家令)として菜っ葉は6日まで、つまり七草が過ぎるまでは食べない。肉も七草まではまず食べない。1日朝夕、2日朝夕、3日朝夕、5日朝夕、9日朝夕、11日朝夕、12日朝夕、15日朝夕、19日夜、20日は朝夕(マユダマガユ)にお膳が出る。

元日は菩提寺である興福寺と宗旨は違うが浄念寺、そして八幡神社に参って新年会に顔を出す。浄念寺には、100年前に当家に居候していた「300年イン

キョ」と呼ばれていた人が浄念寺で弔われているので、拝みに行く。あちらこちらを渡り歩き、あちこちで過ごした年数を足すと300年になってしまうということでその名がついたそうだ。5日にはお寺が年始の挨拶に来る。住職は、日渡のほか、西城(屋号)、小野良組(屋号)など寺が開基のときの檀家5軒に挨拶に来る。」現在日渡は、護寺会副会長。(スライド)

いっぽう、家をすべて流された尾形家(屋号はオオイ)の例。写真は、流されるまえに撮影したものです。

尾形家の家は、文化7年(1810年)建築といわれ、古い網元の家で貴重な有形文化財でした。ひいおばあさんが嫌だということで、指定は断っていました。指定されると、手を入れることが出来なくなるからです。流されましたが、火災を免れました。現在はその部材が歴博やその他研究者たちの手で回収され、廃校になった月立小学校の校舎に保管されています。日本ナショナルトラストなどの尽力で、大島架橋の工事予定地に小々汐が組み込まれているために、もどおりの場所にはなりそうもありませんが、再建される見通しです。

「現在住んでいるアパートはいわば「仮住まい」なので、妻が購入してきた市販の長方形のしめ縄を下げるぐらいだが、流された自宅跡では、お年とりの儀礼をおこなった。10:30に待ち合わせ。家族で二手に分かれてミョウジン(明神)さん、イワクラさん(お天王さん)、金毘羅さん、オクマンサマ(三峰神社)、イドガミサマ、昔蔵があった蔵の跡地を拝んだ。今回は例年とは違い飾り付けはしめ縄と御幣束を合わせて簡略化したものをガムテープで接着し、よりしろとした。オハネリといい、巾着から米を3回ずつ撒き、二礼二拍一礼、四方拝(すでに述べたすべての神と八幡様、および金華山を拝んでいるつもりだという)。オクマンサマは、小々汐に移転する前に屋敷があったとされる場所である。イドガミサマは当時の井戸跡(といっても痕跡はない)。イワクラサンへの参拝に同行した相澤卓郎君によれば、イワクラさんではオハネリはしなかったという。米の入った巾着を持っていかなかったためであると思われる。

イワクラサンには、尾形さんの自宅のあった場所から山を登っていき、向かう。この山は尾形さんの所有地であるということだったが、毎年秋になると松茸が生え、近所の人も取りに山を登って行くのだという。3月11日の震災で発生した火災で、この山でも火事が起こった。幸いにも火は自然消火したのだが、今でも火事の名残が山中の至る所で見られ

た。山中に石でできた社があり、そこに飾り付けをする。ここでは、右の写真のように左右の松にしめ縄をくくりつけ、餅を供える(しめ縄の房は5房、かきだれは4つ)。本来なら、松の木にはしめ縄一緒に松の枝もくくりつけるそうだが、今回は省略されていた。また餅も例年は自宅で作くそうだが、今年は市販品で間に合わせた。蔵は今回の震災で流されてしまっていて、今ではプレハブが立っていた。蔵にしめ縄を飾り付けていたそうだが、プレハブにはくくりつけられるところがなく、他の所と同様にしめ縄と御幣束を合わせたものを置いただけで終わった。

金毘羅様祭典(旧の10月10日、新では11月10日前後)では、昔は、岩手の室根にある神楽を呼んで「アマノイワト」「ヤマタノオロチ」など神話にまつわる神楽を奉納していたが、その後旅芸人の芝居を奉納するようになった。現在ではオミキアゲといい、神官を呼んで祈祷し、ナオライ(直会)をおこなっている。

八幡神社で、大年神、開運福祿寿の切り子、幣束、鯛の切り子、星の玉(7枚セット)、かきだれを購入。本来は(現在は「貸し出し中」で手元にないが)、オシラサマの布も暮れに加える。カミサマが行う家もあるが、大家では家長が行う。正月1日に午後におシラサマを出し、16日に地区の方が訪れておシラサマオガミをしてからしまうことになっている。」

二つの家の例だけとりあげましたが、そのほか話をうかがったどの家の方にも、できるだけ例年通りにしようという気持ちが随所に見られました。

IV 民俗芸能とコミュニティ

さて、私が最近力を入れているのが、被災地気仙沼の無形文化財、つまり民俗芸能の実態調査です。これは実は私ひとりのプロジェクトではなくて、宮城県が立ち上げた地域文化遺産復興プロジェクトの一環です。全国の20人ほどのフィールドワーカーと、10名程度の東北大を中心とした大学院生が関わっています。文化庁の「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の一環として被災した民俗文化財調査事業を実施することになったのです。3.11で甚大な被害を被った宮城県の無形文化財の被災状況と復興状況の実態調査がわれわれのミッションでした。来年の2月23日に東北大学でその成果を公表するシンポジウムが開かれます。

文化財保護課はともかく、私がこれで何を知らうとしているかという、民俗芸能の担い手となるコミュニティの実態を知りたいと思っているわけで

す。基本的には、その担い手は、地元に残った人々で、地縁、血縁に根ざした人間関係のなかで生きています。過疎化と高齢化は気仙沼にももちろん押し寄せていますが、むしろ残っている方々は、地縁・血縁を都会の魅力とか経済合理性よりも優先した人たちです。もっとも、70年代ぐらいまでは、遠洋漁業と水産加工業で気仙沼自体が経済的に潤っていたので、仙台や東京などに移住に行ったり、就職したり、という必要がなかったということもあるのですが。

今回被災はしなかったのですが、早稲谷という村が気仙沼の山手にあります。そこの鹿踊り保存会は、ずいぶん長い間、早稲谷で生まれた人間にしか鹿踊りを教えませんでした。大正時代から戸数も、5つの隣組も村の校正はほとんど変わらず、若い男たちが徴兵された戦争中も絶やさず氏神的な地蔵尊に奉納していました。最近では、早稲谷を含むいくつかの村で構成される学区を持つ月立小学校の学生に総合学習の一環として教えていますが、教えるまでに保存会内で反対があり、3年間議論したそうです。都市化されて匿名性が高くなり、地縁も血縁も切れた社会では想像も出来ないことですが、基本的には氏神、先祖への奉納が民俗芸能の基本です。観客を意識したイベントとなるのは、むしろこの本義が失われた、宗教学でいう「世俗化」の結果なのです。先ほど紹介した尾形家、オオイの「小々汐うちばやし」も総本家のオオイを中心にして、分家とあわせた同族団を中心に伝承しています。

V 浪板虎舞

私は手はじめに「浪板虎舞」の聞き書きをはじめました。2011年12月28日のことでした。

「震災で亡くなったのは、前幹事長で顧問、会計兼副会長(規約上自治会長は保存会副会長を兼ねることになっている)夫妻。浪板1地区では6名、浪板2地区では17人、計23名が犠牲になった。

もともとは、カトク(家督)つまり長男しか虎舞に関わることはできなかった。しかし、大学にいったり、就職したりで浪板を離れる人も多く、担い手の確保がかねてから課題だった。昭和41年に保存会ができて規約が制定され、「火曜の会」という集まりもあったが休眠状態だった。私(小野寺氏)が平成14年に浪板に帰ってきてから活性化を訴え、火曜日夜7:00から毎週笛太鼓の練習をするようになった(火曜の会)。そのころから女性も太鼓を叩くようになり、平成16年ごろには熱心な女性会員が集まるようになった。

震災が起こっても、浪板全戸がそのまま保存会会員であるという規約はそのままであり、改正するつもりはない。浪板の216戸は、いままも戸籍もそのままだし、したがって規約上浪板虎舞保存会の会員である。今後仮にどこかに住所を移したとしても、当人およびその子孫は虎舞の活動から排除しない。将来的にはもともと叩いていたが疎遠になっていった人たちも含めて、「準会員」のようなことも考えているが、それは今後の検討課題だろう。4月に行われる保存会の総会で現時点までの案を開陳し、検討する予定である。

虎舞は、もともとは海上安全・大漁祈願のための舞であるが、家内安全、商売繁盛のためにも舞う。結婚式や船おろし、新年会などめでたい席に招かれて披露する。保存会会員からは会費も徴収するが、その際のご祝儀が主な資金源である。

来年の初舞は1月15日に飯綱神社に奉納する。のちに須賀神社で舞う。1月の第3日曜日ときまっている。須賀神社の縁日は10月15日。この折には須賀神社に奉納してから飯綱神社で舞う。飯綱神社は商売の神であり、須賀神社は不動明王を祀っている。浪板虎舞は招かれればどこへ行っても披露する。昭和48年(1973年)には大阪万博に招かれた。今年の6月4日には横浜の山下公園で震災後初の虎舞を披露している。

9月15日の縁日にもっとも近い土日ないし祝日を選んで「八幡さまのおサガリ」が行われる。八幡神社の御輿の担ぎ手、ロクシャク(陸尺)はトーマーと呼ばれる当番制で担当することになっている。鹿折地区では4つの地区(中才・浪板・蔵底(くらそこ)・東八幡)で毎年当番を決め、八幡神社での祭礼をおこなっている。当番はこの4つの地区でローテーションにより決め、中才・浪板・蔵底・東八幡の順番で回していく。

湾内の人は鹿折八幡神社の氏子であるが、各地区にそれぞれある神社の氏子でもある。というより、自分たちの神社である、という認識である(『気仙沼市史』VII、514-5頁には、「無格社 飯綱神社、明治42(1909)年9月30日八幡神社ニ合祀」とある。明治39年(1906)の勅令の影響であろう)。浪板は、行政区としては浪板1、2と分けられている。浪板1の住民は飯綱神社の、浪板2の住民は須賀神社の氏子崇敬者である。

浪板はオリンピックの年がトーマーで、その次の年は蔵底と呼ばれる新浜1、2丁目あたりの町場、次の年は東八幡あたり、そしてその次の年は、西中才と東中才が担当する。今年担当の浪板は大丈夫だが、今回蔵底は大打撃を受けているので、ローテーショ

ンが崩れる可能性は否定できない。巡行の途上、氏子の庭などに休憩所がもうけられるが(一般に言う「御旅所」)、飯綱神社、須賀神社の脇には集会所があり、そこに神輿が入って直会が行われるときには、ロクシャクの担当であるなしにかかわらず、参加する。浪板がトーマーの時には、八幡神社の前夜祭に虎舞を奉納し、神輿渡御の際には鶴が浦から船で出てお神明さん(五十鈴神社)の前を通過して鹿折の岸壁に着ける。会場で三回ほど回るが、右回りだったか左回りだったかは定かではない。葬列は左回りだというのは確かなのだが。この折りに神輿の後ろには太鼓がついてうちばやしを行い、虎を舐先で振る。浪板には虎舞があり、中才にはうちばやしがある。以上は幹事長の小野寺優一さんの話です。続いて保存会会長のお話から補足します。

虎舞は飯綱神社でまず奉納をして、漁で生計を立てているところを回るものだ。須賀神社は150年ほど前から現在のかたちで崇敬されていたと聞いている。現在の別当は小野寺(屋号は岩城)、渾名は「50番」。タクシーをやっている。飯綱神社の別当は、長浜(屋号)。名字は同じく小野寺である。須賀神社自体は12、3軒の家の共有地であるが、ほとんどそういった意識はない。以前はカトクだけが関わっていた。兄が出ていたころには大阪万博で演じたそう。前会長の小野寺万治郎氏は芸達者だった。前前会長の小野寺伸男氏の代から市に無形文化財指定を働きかけていたが、なかなかうまくいかなかった。2006年になってようやく指定された。自分が会長になったのは、前会長が退任してから何人か候補が立ったが、あまりうまくまとまらなかった。「日渡しかいない」と推薦するひとがいたが、もともとはカトクでもなかったのでよくわからないし、固辞していた。最後に井戸端が幹事長をして支えてくれるなら、と総会で条件を出した。井戸端が了承したので引き受けることになった。

祭礼の時の会費は1000円だが、お札が700円で残りの300円で飲食費をまかなう。もともとは「ホウゲ(宝桶)と呼ばれる桶に入れておにぎりなどを供したものだ。ホウゲは戦後米不足の時期に使われなくなったということだ。主立った家は8軒だが(①鳥越(小野寺)、②岩城(小野寺)、③浦島新屋(昆野)、④荒屋敷(熊谷)、⑤日渡(昆野)、⑥日渡の上(小野寺)、⑦高屋敷(小野寺)、⑧木下隣(村上))、そのうち、鳥越、岩城、荒屋敷、日渡の4軒は原則毎回主立った役割を果たす。浦島新屋、日渡の上も準備の中心に加わることもある。岩城と荒屋敷はエンルイである。

従来は、祭典への関わり方にも序列があったが、あるとき平等にしたほうがよいと主張する村人の一人が「ホウゲ」を打ち壊した事件があった。木下隣が仲介しておさめた格好となっている。

浪板1地区は6組の隣組に分かれており、かつては3組ずつ交代で役を果たした。現在では人口流出の影響でほぼ4組ずつになっている。多い組は11軒ほどになるが少ないところは5軒しかない。

震災の時、虎の頭の練習用は蔵にあった。それもぬれたが無事だった。ホンモノは新しい頭を製作依頼していたために八日町の齋藤則男氏に預けていたので被害を免れた。現在ホンモノは芸能部長が保管している。

VI 小々汐うちばやし

それでは小々汐の尾形さんにもう一度登場願って、「八幡様のオサガリ」について語っていただきましょう。

「浪板地区までは、ロクシャク(陸尺。担ぎ手。葬式の時にもお骨を抱く者もロクシャクと呼ぶ)の地区ごとのローテーションが組まれているが、大浦、小々汐、二ノ浜、三ノ浜(総じてシカハマ(四ヶ浜)という)はロクシャクにはならず、神輿が巡行した時の酒食の準備をする(「御旅所」とは言わないらしい)。現在では、人口減少と高齢化で、一地区ではロクシャクをまかなえず、他地区の助けを借りることも多い。神輿が巡行すると、家の前で八幡様の掛け軸をかけて拝んだりする。三ノ浜からは神輿とロクシャクは船で海上にでて海上で三回まわり、川の対岸につけ、対岸の鹿折地区を北上して戻る。船は四ヶ浜から出るのが、船を持っている家が協力して出すので、どこかは決まっていらないが、船を持っている家は限られているので例年同じ家が出すことになる。ローテーションはない。大浦では厳島神社、小々汐は「大家」、二ノ浜は高松商店、三ノ浜は、御嶽神社(みたけじんじゃ)にほど近い小松武雄家がお旅所となる。2011年は、(2012年も)八幡様のオサガリは、震災の影響で行われなかった。

VII

おわかりになったでしょうか。村社である八幡神社のオサガリという神輿巡行の経路をみてみると、この旧鹿折村のコミュニティの中核がどこにあるのか、わかるのです。旧家だったり、講組の代表だったりします。仏教の檀家組織が神輿巡行の単位になっているのは、おかしいとお考えかもしれませんが、明治元年に神仏分離令、明治5年に修験道廃止

令が出て、修験道から神道か仏教どちらかに態度を決めるように迫られるまでは、このあたりは修験道の震場でした。上鹿折には八雲神社があり、ほぼ同じルートでオサガリをしているのですが、八雲神社別当は羽黒派だった。御嶽神社は本山派だったので、明治の合祀令で必ずしもうまく統一されなかったのかもしれませんが。神社や小祠、また必ずしもそれらに奉納というかたちで対応していませんが、民俗芸能もかつての字単位で違うものが伝承されており、上(明治政府)からの支配に必ずしも乗っ取った組織になってはいません。同族団中心にかなり主体的に結束を固めてきました。それが、今回の津波で、いくつかは危機に瀕しています。たとえば尾崎の大名行列は、装束が流れただけでなく、地元住民が三つの仮設にちりぢりとなり、解散を真剣に検討していました。あるいは浪板のように、被害は大きいですが、受け入れ体制を整え、人が帰ってくるのを、あるいは新しく人が入ってくるのを待っている団体もあります。私が民俗芸能を通してコミュニティの原像をみたい、というのは、このことです。

図でごらんのように、鹿折八幡の氏子の範囲は、ほとんどそのまま津波の被害を被った地域です。逆に言うと、オサガリができるようになるのは、この地域が復興したときです。それがどのようなかたちになるのか、まだわかりませんが、私はそれを注視していきたい、と考えています。

私の知る限り二つの神社で今年オサガリ、ハマサガリが復活しました。羽田神社と古谷館八幡です。まだ仮設に神輿が巡幸しても人が出てこない、というような難しい状況にあるようですが、今後の動向が注目されています。一つ指摘できることは、市町村合併の影響で、この地域は氏子組織が若干混乱していて、鹿折にくらべアイデンティティがやや交錯しています。明治の合祀令といい、市町村合併といい、経済合理性だけでコミュニティを改組改変するといいいことがない、という結果が数百年、数十年後の震災を機に可視化されているような気がします。

最後にこの4月に気仙沼の方からいただいた私信の一部を紹介し、締めくくらせていただきます。

「思いの外海がよみがえるのが早く、養殖漁業は急ピッチで作業を始めました。今回の津波は、自然が人間のおごりをおしかりになったのだと思います。いまや海の青さ、山々の緑は平常に戻り、ふたたびわれわれに恵みを与えてくれるようになりました。みんな一人ひとり元気です。これからは、ホンモノをつくりあげなければなりませんね。

今日は、難しいテーマでもあるし、うまくお話しできたかわかりませんが、聞いていただいてありが

とうございます。私のお話はひとまずこれで終わります。